

## 新刊紹介

①金子昭『シュヴァイツァー：その著作活動の研究—哲学・神学関係遺稿集を中心に—』（白馬社、2018年）。

おやさと研究所の연구원である金子昭氏はよく知られたシュヴァイツァー研究者である。1995年に刊行された『シュヴァイツァー その倫理的・神秘主義の構造と展開』は、日本倫理学会第46回大会（1995年度）で、和辻賞を受賞している。その後も研究は進み、論文を発表されてきたが、本書はその研究の歩みを知ることのできる1冊になっている。なかでも本書はシュヴァイツァーの遺稿集を含めた全著作の本質的構造そのものに迫るものである。



②神田秀雄『如来教の成立・展開と史的基盤—江戸後期の社会と宗教—』（吉川弘文館、2017年）。

神田秀雄氏は、おやさと研究所に在籍されていた頃、伝道参考シリーズ3として『如来教の思想と信仰』（1990年）を上梓された。その後も如来教の史料整理・刊行を積極的に続けられ、また、関連する著作や論文を発表されてきた。本書はそうした如来教研究を自らの専門分野でもある宗教史研究の視点から、如来教を江戸後期という時代・社会に焦点をあてて、その成立について論考されている。民衆宗教の成立を考える上で、大きな示唆を与えてくれるのではないかと。



③Saburo Shawn Morishita (Ed.), *Materiality in Religion and Culture*, Tenri University – Marburg University Joint Research Project (Lit Verlag GmbH & Co. KG Wien, 2017).

本書は、2014年9月17日から19日にかけて、マールブルク大学で行われた天理大学とマールブルク大学との共同研究

プロジェクト「宗教と文化における“物”」での発題をもとにした論文集である。天理大学からの発題は以下の通り。  
澤井義次「The Significance of Materiality for Religious Studies」  
深谷太清「Perspectives on the Body in Early Modern Japan」  
森下三郎「Displacing Belief from Ritual Practice」

堀内みどり「The Image of Kālī and Ramakrishna's God-realization」

島田勝巳「The Icon and Gaze in Nicholas of Cusa's De vision Dei」

東馬場郁生「The Mirror as an Embodiment of the Sacred in Japan: A Focus on the Kirishitan Mirror」

梅谷昭範「The Matter and Meaning of Exhibiting the Tenrikyo Overseas Mission」

岡田正彦「The Role of Architecture in the Study of Modern Japanese Religions」

④カルナカル・バイデヤ著、小尾二郎・明石六郎・マシュー・アイナン訳『ネパールの民話集』（Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, 2016年）。

ネパールの文学や民話などを積極的に翻訳（英語・日本語）してきたアイナン先生は、研究所の *Tenri Journal of Religion* の出版に関わってきた下だった。本書は、アイナン先生が立ち上げた NGO びしゅわ（ネパールの子どもたちへの教育支援）が、ネパールのラトナ書店と共同出版したもので、昨秋から日本でも入手できるようになった。多様な文化的要素・民族で構成されているネパール。そのネパールで伝えられてきた民話を日本語に翻訳したのが本書である。異文化理解の入口になるのではないかとと思う。

（堀内みどり記）

